

冷語  
執火  
語

特273

508

紫涯著



始



特 273  
508

卷頭 蕪辭

此の集は私共が數年に亘て營むた松阪に於ける記者生活の片影に  
 外ならぬものであつて、此の集を刊行するに至つた動機は、私共  
 が松阪の操觚界から暫く別れなくてはならなくなつたことに、基因し  
 て居ます。松阪の操觚界に私と云ふ一個の記者が居たと云ふことを  
 殘したのが爲め、それが紀念の目的に向て出版したものであります。

◎

追想しますれば、非才を願す筆を執つて居た此の間に處して、至  
 高なる天職の許に如何の責務を果し得たでせうか。思ひ茲に至りま



大正  
7. 6. 5  
内交

すると甚だしく羞耻の情を覺へずには措けません。然し松阪の操觚界を以て久住の境地と定め、心から願つて居た私共は此後とても松阪を忘れると云ふことは出来ないのであります。

◎ 此の集の刊行と云ふことが、此後に於ける私共の事業の前提ともなれば私共は洵に是れに越した喜びは無いこと、信じます。此の集によつて私共が松阪と云ふ地に手を染めて居た記者の一人であること云ふことを考へて頂き、且此後に於ける私共の事業に同情を賜るやうのことに至りますれば亦とない幸福だと思ひます。

短時日の裡に總ての運びをつけたこと、て、實に内容、外觀共に貧弱なものであることを怖れて居ります。

新緑の心地好き頃 著者識す



目 次

・ 冷 語 熱 語

- 團體勢力の濫費
- 自己眞實の創造
- 工場法と職工の理解
- 商業經營と工業經營
- 青年會の統一難
- 青物市場と農業家と
- 銀行から信用を引いたなら
- 第二の松阪町を何分すべき
- 背反と調和
- 戦闘から
- 神秘の實在
- 復讐の日に

冷語熱語

# 冷語熱語

## 團體勢力の濫費

森西紫涯著

既設の團體若くは團體結合の運動は已にしてそれ自體が一個の勢力である。而して其勢力には二つの側面を表示することがある。即ち静止の勢力と活動の勢力とであるが、前者は消極的の如くであるが實は勢力の蓄積であつて後者は勢力の消費である。

私共の努力と云ふものが道義的に發足して行く点に於ては儘に所謂細長主義なるものが最後の勝利であることを承認する事の出来

### 藝慾の量

詩人と云ふ人

富める人

素足の誇

お七の戀

我が歌

黄色い花

十月の歌

窓あかり

灯の行衛

奈良の秋

繪皿の灰

以上

目次

冷語熱語

冷語熱語

團體勢力の濫費

森西紫涯著

既設の團體若くは團體結合の運動は已にしてそれ自體が一個の勢力である。而して其勢力には二つの側面を表示することがある。即ち静止の勢力と活動の勢力とであるが、前者は消極的の如くであるが實は勢力の蓄積であつて後者は勢力の消費である。

私共の努力と云ふものが道義的に發足して行く点に於ては慥に所謂細長主義なるものが最後の勝利であることを承認する事の出來

藝文の量

詩人と云ふ人

富める人

素足の詩

七七の韻

我が歌

黄色い花

十月の歌

窓あかり

灯の行衛

茶室の秋

繪圖の秋

以上

るのは要するに靜止的勢力の發動が如何に力あるものであるかを裏書することが出来るのである。知らず古人今人に亘つての盛衰も、時代の消長も活動の次に來るものは疲勞であらねばならぬ。團體生活に於ても尙ほ然りであると云ひたい。

方今行はれんとする團體結社、或は營利株式會社等の企てを見んとする時に、是れが未だ所謂お膳立の調はざるに早くも大袈裟なる目論見を發表し、山師的誇大の効能書を公示して却而成立後の経過をさへ疑はしむるが如き舉の滔々として旺に行はれつゝある不眞面目の行爲には一方ならず驚き且歎かざるを得ない。

其の勢力を過信して活動の好名目に驅られて勢力の濫費を敢てな

すが如きことあらば其の結果は甚はだしき疲勞と損害とを蒙むることの當然なるを覺らねばならぬ。濫りに活動の勢力に訴へて成功を一時に收めんことに汲々たらば是れ抑々失敗の最大原因であることを忘れてはならぬ。私共は急進主義者の諸團體に於て屢々其の實験を目賭しつゝあるだけに愈よ其の念慮の一層高調熱烈なるものがある。

### 自己眞實の創造

甲の前に於て乙を談し、乙の前に於て甲を評するの言葉が同一である場合には、其の批判は何等自家創造の發現がない。御座なりの御都合主義を以て處世上には上乘の主義なりとなされる現代には所

謂窮乏なる者の幸福であることを悲まぬ譯には行かない

模倣に生き隠棲に活きんとする盲動者流の憐れなる生活は、自覺の消滅をさへ慚しも怖れない惰力の付添ふものである。壹の是認は二の否認に對して絶對的不能力であるとされた多數力主義は社會生活の便宜上設けられたる統一函である。征服に襲はれ盲従をことゝして何等自己の創造に努力し得ざる者は實に現代社會に生存の意義を認めることは出来ぬ。而して自己を眞實に確立せよ親切に保持せよ、過激に走り誇張に流れてはならない。其處に生存の最大榮譽と最大幸福とがあることを忘れてはならぬ。

### 工場法と職工の理解

男女職工の福音とも云ふべき工場法の制定されて以來、職工が其の恩恵に浴して居ることは云ふまでもないことであるが、實際に於て工場法の眞義なり精神なりを理解せず、或は法文の如何すら了解するに徹底を欠いて居る程の職工がないでもない。

地方に於ける小工場の職工、殊に辛ふじて同法規を施行さるべき範圍に入る程度の工場に於ては、其の理解力の缺乏せる職工が可成り多いやうである。然し法の精神若くば法文の全部は工場主の側に於て理解して居れば充分であると云ふ條理を如何にしても見出し能はぬ以上、其の恩典に浴すべき職工に於ても同法の眞諦を理得しなすでは、自分等が何れの道を以て遇せられて居るかの實際を知るこ



とは出来ないではないか。茲に於て私共は工場法の理解と職工と云ふことを強く考へさせられずには居れない。

元より法規中にあつて自己の有効なり有利なりと思惟する部分々々の箇所にては解しても居やう、が而も半知半解より生ずるの弊害は、其の生殺しなる点に於て、全然、未理解者のそれより生ずるものより一層より以上に難物と云ふべきである。

現時、地方小工場の實狀を窮ふたなれば、恚うした欠点から吹き込まれる處の悪傾向は、既に工場主も於ても是れを認め其の悪性の結果に付きては尠く共、苦味を嘗め、同法規施行後に於ける第二の悩みに陥つて居ることは争はれぬ事實である。

如何にして男女職工に眞義の了解と徹底とを計るべきか、その事實に於て甚だしく困難な仕事ではあるが、是非共適當の施設の下に研究機關の實現を要望する。

### 商業經營と工業經營

松阪町が商業地であると云ふ言葉は、私共の能く聞かされる處であるが、其の商業地なるの意味が所謂「松阪商人なる名によつてなるもの」とすれば、其の内實に於て貧弱であることを思はずには措けない。

田舎に於ける商業地と云ふものは事實に於て小賣商人に依つて築き上げられてあるものであつて、其の取引に隨伴する經濟的の消長

は、一地方に極限された財貨の通還作業に外ならぬこととなる。私共は此の意味に於て地方の商業地と云ふものを餘り結構なものだとは思はれない。而して松阪の地を工業經營地となすべきか、商業經營地となすべきかに就いて考察を費す場合には、私共は前者を以て町是となすべきことを肯定することが出来る。

工賃の安價なることによつて經費の輕減を計り得る地方工業は工賃の安價なるが故に製造能率に違算を來すべき筈のものではない。工賃の安價なる素因は其の地方の生活が比較的客易にして低廉に行はれて居るからによるものであるから、此の條件によつても地方が工業經營を以て大本と定むるだけの一要素を具備して居るものと云へ

るではないか。

然し工業の發展は動力の獲得大如何にある。

若し動力の需給關係に不足を生ずるとすれば、其の地の工業は其の他設備の萬善を盡すとしても、是れが開發進展に付きては甚だ怖るべき欠陥を來すことを悟らねばならぬ。再び言ふ、完全なる動力の獲得は工業界を發達せしめ、工業の發展は地方富源の第一要義であることを忘れてはならないことだ。

近時、我地方に興業旺盛の兆あるは我地方の爲め大なる慶事となすべきであつて、最も基礎の安定せる所謂成金の結果による工業の振起は決して恐るべきものではない。唯憂ひ且つ惜むべきは動力發

動の多寡如何にあつて、私共の松阪町の天空に聳ゆる煙筒の數を關する時、常に心闇き感に撃たれざるを得ない。

### 青年會の統一難

都市に於ける青年會の施設如何が近來一つの難問題として取扱はれて居る如くに、一地方的都邑である松阪町に於ける青年會のそれも大に審議研究を重ねなければならぬのは當然のことである。

由來、農村に於ける青年會にあつては、會員各自の日常生活や日課の作業に於て同一の形跡と性質を具備して居る。例令、農業上の技術の發達を企圖すること、品種の改良を計ること等其の他總て分類されたる各種の事業と雖も其の内容の何れも共通性のもので、各

人同一なる農村經營の歸一に過ないのである。それによつて農村に於ける青年會の施設なり活動なりは自然來るべき結果として統一を欠かぬことになるのである。然るに町に於ける營業は農村のそれに比して甚たしく複雑である。各人各色を帶んだ町の青年が會員たるべき青年會の統一は其の内容に於て甚だ困難なるものがあるの、必然の事由にある。

凡そ統一を計るの目的に向つては當然何等かの目標なり標準がなくては叶はぬことである。私共は是れが目的に向つて有力なる材料として成る可く多數性なる共同作業の樹立創設を町青年會に對して要望する。現在の如く唯に年一二回の大會に於て各區會の孰れもが

顔合せをすることによつて如何にしても統一の計り得やう道理がない。尙ほ更に進んで強要するの一点い、是れが振起策に就ても單に外觀的施設に意を用ふるの切にして内面的精神的の交渉なり考察なりを忘却してはならないと云ふことである。

思想の統一。是れが實に偉大なる一事業であることは承知の筈であるが、而も會目的の一半が其處に繋がれてあることは云ふまでもあるまじ。

### 青物市場と農業家と

◆農業上の技術を向上せしめ、品種の改善を計り、農作物の收穫量を増進せしむることに最善を盡す當局も、亦その直接の實行者たる

る農業家も、單に生産上の増量を以て第一の目的とし、それに関連する需要關係に盲目で、經濟觀念から發足した品價の交渉や消長に付きて何等の智囊なしとしたならば、是は甚だしく片輪車の難物たることは免れない。

◆重要農作物である米麥の取引趨勢や、品價上下の状況に一意専心氣を遣り心を勞する農業者にして、永日不斷に其の収益を見つゝある野菜其他の第二位たる農作物の市場に於ける販賣の傾向に留意すべく不親切なるものがあるとするなれば、夫等に向つて覺醒を促すの必要を認めはしないだらうか。

◆毎朝開設せらるる青物市場に搬入される野菜及其他の作物には

一般農作者の經濟觀念の隨伴することは必定のこととするも、其の留意、研究の度に於て高調して居ない限り、地方農村の日常的收得の増加をより以上に計ることは能はないことであらうと思ふ。

◆市場に於ける需要の消長。恙うした一事を農家に於て最も眞摯な態度で研究して貰ひたいのである所謂お得意先たる市人の如何なる物を嗜好して居るか、什麼物を要求して居るか、眞個の問題である。品種の改善。それは洵に有益であり、栽培法の研究。それは實に尊重すべきであるとしても、其の作物の市場に於ける需要關係の如何を考察しなく單に立派な物を作り揚げるとしたならば、それは一箇の愛翫作物であり、一の遊戯的贅澤物に過ぎぬこととなるでは

ないか。此の一義に就ては是非共地方農民諸士の一考を煩しいものである。

### 銀行から信用を引いたなら

◆信用は無形の財産也の言葉が、商取引の上に金科玉條として奉信されることは何の時代に於ても變りはない。處が吾々の同胞程印鑑を多く使用する者は他にないと云ふことである。此の一事は信用の確立を保持するに切なるものとも云ひ得らるれば亦、懷疑の念に襲はるゝの深甚なるを意味するものとも云ひ得られやう。

◆萬能でなく共、多能なる働きの主力を具備して居る金銭を取扱ふと云ふことは社會現象の内でも餘程重力なるものゝ一つである。

此の意味に於て銀行業の上から信用といふことを控除したなれば其の蒙る打撃は他の業務者より一層に大なるものがある。

◆由來、銀行業の取引なるものは因襲の久しきに亘つて約束づけられたる殆んど習慣的の取引筋なるものがあつて、殊に土地色彩の多く濃い地方では、其の自然的約束觀念の根強いものがある。

◆二者若くばそれ以上の相對者が現はれた場合、市場に於ける競争から生れる争奪は甚だ危険性を帯んだものと云ひ得やう。それ若し信用を以て基本的條件とする銀行業者が所謂お得意先の争奪に没頭して之れが高調する結果、非常手段にも近い行爲に出る様のことありとすれば、开は儘に悪傾向であると云はねばならぬ。知らず財

界に於ける同業者の消息や如何。

## 第二の松阪町を何分すべき

多数力に據つて活動する團躰の終極は横暴なる勢力利用の邪路に陥ることによつて纏て自派の衰亡と倒壊とを招くの結果に至るのが當然の成行きである。横暴は強者の常套的態度であるとしても、横暴を責むるの聲が必ずしも強者に對する弱者が、反抗力を表明したものとは云へない。反抗力の躍動する場合に於て既にそれ自體が强者たり得るのである。

時代の推移に伴ふ勢力の轉換と廢滅とは、一つの技巧にも等しい謀策を以て、如何とも成すことの出來ない程に偉大な自然的傾向を

○ 帯んだ主力の發動によるものであることを承認する。来るべき第二の松阪町を二分すべきか、三分すべきか、此は考察するに値ひするの問題であらうと思ふ。

### 背反と調和

◆ 実行者の無言と、薄行者の多辯とは二律の背反である。

◆ 反抗の態度は強者の姿だと思ふ、而も反抗はより多く弱者に據つて繰返されるものではないか、反抗を試みる場合に於て弱者は如何なる程度に迄強者たり得やうか。

◆ 趣味と性格との何れかに異つた處のある者に向て眞箇の朋黨的契合を續け得られることがある、恚うした場合には自己が共鳴を感じる處を的確には見出し得ないものだ、二重生活の存立は此處だ。

◆ 「好きこそ物の上手なれ」と云つて見た同一の口で「下手の横好き」と云つたら、相手は何と答へるか疑問だ。

◆ 短所であり長所であると云ふ言葉程、便利で重寶な云ひ草は又とあるまい、不服の方は手を擧げなさい。

◆ 二つの離反したものと一致、矛盾したものの同者の併合は大なる宇宙に實在して居る。

◆ 人の家庭には夫唱婦隨もあれば婦唱夫隨もある。仕うせ浮世は變ふ出來揚つたものだ。

◆ 儲かつたと云ひ振れる商人もなければ料理食ひが美味と賞讃することも少数だ。

◆ 總てのものを超越して離反して居ながらに眺めて見る心。それは洵に得難い貴重なものである、かうした努力の繼續は我々に取つて全く有意義なものであらう。

◆ 事實を愛好す、嚴肅にして動すべからず偽るべからざるものは事實である事實は總ての物の前に絶対大である。

◆ 結論と云ひ歸趨と云ふものは仕うせ詰らないものに極つて居る、靜止發動の不定なる道程こそ有意義なものだ、結果に焦慮する者は飽滿を期待する者と同一である。善にあれ惡にあれ終結の後に来るも



のは歎息だ。

◆ 自信と云ふ事は自惚れと云ふ意味ではなく、鷹揚と云ふことは莫迦と云ふ意味の事では決してない。

◆ 金錢は多藝多能である。或る半面に於て圓滿を意味する、而し金錢程我れに不親切なものは多くあるまい。

◆ 所詮二つの相反した心を持つた私共に取つては肯定も無ければ否定もない。私共の心の中には常に理性と感情と、理想と現實と、憧憬

と冷靜と、情的感情と科學思想と、讚美と罵倒との各々衝突が激しい矛盾の戦ひを起して居る。冷靜な境地に自己を措いて居る内にもいつか激しい感情的な昂奮に襲はれる事がある。恚うした時には徒らな空想や追想が大波のやうに押し寄せて來るのである。

### 戦闘から

志願をして或は義勇軍を編成したり、乃至は宗教の宣傳を擲ち道徳の説法を捨てゝ出征する人も、所詮はそれら道徳や宗教の奴隷に過ぎない。

彼等の支配されて居る道徳や宗教も一國に限られたことであらう。戦闘は自我充實の活現である。大なるエゴイスタックの權化である、

一國の大信仰者を以て任じて居る宗教家も、聖者と視られて居る道學者も、皆均等しく銃を把つて敵に對立して居る。人を敵視したり、戦争をすると云ふことなどは勿論好まないが、國法の示す處によつて國民の一人一人は何れの階級に拘らず戦争に従はねばならない。元より法律の制裁に伴ふ刑罰が恐ろしいのである。茲に至つて其の奉信すべき宗教も道德も實に根底のない淺薄なものとなりはすまいか。

戦争を嫌惡しながらも尙ほ出征して銃を握らねばならぬ矛盾、大なる苦しい矛盾を黙過しながら、個人性の利己發展の爲めには、見て以て悲惨とする斃し合ひなる者を強列に演らねばならぬ。

統治者の所謂安寧秩序の保持や爲政者の國利民福の増進によつて宣戰されたる人生終極の慘劇は小さい道德や宗教で付うすることも出来やうか。

遺憾ながら戦時道德と云ふやうな型のものを吾人は不幸にして耳にせないものである。

### 神秘の實在

私共は現實に没頭して其の最終極に到達する時、私共の智的批判に依つては到底解脱し能はざる或る者の嚴存するを見る。説かんとする悩み、説き得ざるもの、人爲的の機能の不可抗力なるものは神秘の實在である。

運命は自然の底に横流するものであり神秘の現はれは自然の懐に眠るものである。

既成宗教は神底を以て一空想の上に築き上げて居る。然しながら私共はそれを信すべく餘りに科學的であり、慰安を求むべく現代化して居る。けれ共私共は現實に連續を保つて居る神秘の力に依つて生の立命を求め得んとする者である。運命の前に柔順であり、神秘の力に追従するものゝ沈着は、倣さんとして能はざる。對抗の無暴よりは寧ろ其の態度の優れるあるを知ることが出来る。

△△△△△復讐の日に▽▽▽▽▽

私は追従の私を捨てた。

自己の擴大は此の日に至つて絶對の意味を持つて居る。他人の數多い眼が集中された時、私の決心する時が來た。總てのものが屈辱の難を遭遇した前には復讐とそれに連續する戰鬥の外何物もない。

△△△△△詩人と云ふ人▽▽▽▽▽

難解の文字を列らねたとてそれは詩でもなければ、眼鏡をかけて髪を乱して無暗と悲しんだ處で詩人でも何でも無い。李白の暴飲は李白其の人の詩の全躰でない如くに。

## 藝慾の量

富める人

富める人として近隣の總てから天の寵兒の如く云はるゝ彼なる人は、今朝も亦、日課の様にして居る狩獵にと出掛けた。

路傍の草と云ふ草には露を含んで、それに濡れた彼の靴の爪先は朝の日光に輝いて居る。彼は新しい精一杯に緊張した朝の氣分を感味することが出来た。

生活が順調に運ばれて物慾の刺戟を満足に拂ふことの出来る彼に、其の終日の單調と平凡とを打破して屈折ある色彩を加味してくれるものは狩獵そのものである。

自己より貧弱なる者の活んとする力を差し留めることによつて快感を呼ぶと云ふよりは、逃げんとするものを追はんとする心の發動

や、自己が持つて居る不可抗力の權威を承認せんとする誇張な心理發作は、性情の何處かに小さきものを虐待せんとする通性を固有する人間には屢々行はるゝ試みである。而して日々の狩獵は彼に取つてい決して空なる一遊戯ではなかつた。何等かの刺戟がなくては叶はぬ彼として、又大方の慾望を充たし得らるゝ彼には、慘虐の殺到とまで強いものでなくては心の一部を慰めるものとはならない。

毎時と思つて見る憊うした煩ひを考へ盡くした頃には、彼はもうたらく／＼飯を昂り切つて山に差し蒐つて居た。

其の時、何と云ふ動機でもなく自分の妻が病氣だと云ふことを思ひ出した。

さうだ。妻は病氣だ、而も不治の難症であることは知れてある。其の不治の病は彼が狩獵することによつて愈よ重患に趣くのだと妻自身がさう思つて居る、さうした小言も能く云つた。

彼れはそれを思ひ出したのである。それを思ひ出しながら愛犬のエフはと見ると、今にも獲物をと云はん計りに逞ましい勢ひで早や活動して居る。それを見た彼は一時に血の湧き立つのを覺へた。

其の瞬間からは終日不斷の妻の小言も全然知らないものゝやうにケロリと忘れて居た。

時ならずして小さい一動物は恐ろしい人工の利器によつて斃された。犬は狂ひに狂ひ猛つて駆け廻る。

彼れの胸も犬のそれと餘り變らない。  
鳥は柔毛の胸を射貫かれて其處から流れた血は醜い輪廓を描いて居る。

彼の胸が漸く沈靜に傾きかけた時。呼吸の絶へた動物の濁つた灰色の細い眼を見た時。彼れは病み衰へた妻の姿を思ひ浮べた。

而して其の妻の顔をあり／＼と心の奥に描いた。

△素足の誇▽

月の凍る夜、霜の雪かどまでに白い朝、往き復るさの素足の意氣を、江戸は八百八町の巷に誇つた辰巳藝者の一群れには、戀を生命の女と生れても涙と血とを抜き衣紋の襟に包むで立て盡す意氣地に

は五尺男の膽を寒からしめ骨をも挫く健氣さは世を拗ね者の類とのみ笑ふべきでない。

深川は唄に好き處、兎に角にいなせ姿の住む處、勝氣な女が心の筋を打籠める久戀の土地であつた。

素足の誇に散々、浮世の苦勞を甜め盡した跡を探るも詮なき今の世に、埒もなう踏み蹂らるゝ是れも夢、彼れも泡沫の消え失せて江戸の名花の散り果てたのも憐れなり。

△お七の戀▽

本郷に老舗た八百屋の娘お七の戀は、焰の上に終焉を告げただけに一層の熾烈な情味を帯んで居る。

戀を覺ゆる者は多くの場合弱者である、けれども理性の一閃を超越した戀の最終には總ての冷かいものを焼き盡す程に力が籠る。

お七の生命は戀であつた。小姓の吉三が明眸に憧れた時、火を出した自らの手によつて鐘の響きを江戸の夜空に傳へた時、彼の時此の時、戀の外何者もなかつた。

思ひ餘つた身を火に焙られたお七の十七の巳の干支、火と云ふものと巳と云ふものを加へられてあるだけ彼の女の戀は強い響きが含まれて居る。

歌

僧房の扉によりて夕暮の我身思へば涙わりなし

〇 朝の陽は燦爛とせど此の蕩兒、酒を飲み居り歌悲しくも

〇 冷えくくと鏡に映る我が顔のうら淋しかる秋の朝かな

〇 吹くからに西風かなし乾びゆく木の實の色に我が片頬に

〇 夜となればなにをか思ふ我が心うつらくと街の灯を見る

要するに生きてありてふことのみ寂しさを知り涙ぐまるゝ

〇 かなしみを唯そのまゝに歌ひ得ず寂しき日かな晩春に入る

〇 倦怠の生なりしかなそれゆへに誓ひしことも果さでありぬ

〇 父母に享けし生命の一條を持ち倦み居り一日一日を

〇 愚かにもけた、ましようぞ火事を見る群に雜りて我も見しかな

哀れなる節もて唄ふ我が歌に慰められつも心沈めし君はも

○ 脳のみがさわて睡られぬ夜はまれに君の戀なご思ひてぞ泣く

○ 戀人に空似の女行くまゝに淋しき心残りたる街

○ タべふと口にのぼりし一と節の小唄のあこの淋しかりける

○ サフラン酒飲めど酔ひ得ぬ其の宵は昔の歌を唄ひなご居り

夏草の色はも我に強からば三十男の甲斐なきかなや

○ 唯かくてあるべからずと思ひつゝ其の日を過す生の煩ひ

○ 眞夏今、紺青色の波ひかりわが頬に撮つれうみぬしぬれば

○ 宵なれば涼みの町へ俣飛び若き子行けど何事もなし

○ 遊蕩兒今日も今日とて酒の香に春の日脚を見送れるかな



何故と問はど答へん術もなし唯なく悲し今日此頃は

行く春の夜となりぬればそごろにも君と別れし日の思はるゝ

北海の荒れたる朝のうづたかき昆布を拾ふ女かなしも

百筋の千筋の髪の毛の打ちふるふ君がなげきの日の思ひ出よ

水草の花は故なく咲き出でゝ故なく散りぬ悲しからずや

月光は隈なく照れり黒髪は匂へど我の詮かたもなし

花少し散る眞晝なり僧院に經讀む人の眉若ふして

何事か思へる男丘を行き林を行きて何か思える

をのづから心にもなきこと云ひて君を歸せし春の夜悲し

かゝる時離愁を思ひ君思ひ堪えがたきま、眼瞑りてあり

詩

黄色い花

夕暮のわびしさ  
 あらゆる物の刺戟を超越した  
 ものゝ氣ばいを呼ぶ感觸にたどれて  
 朽ちかけた窓のほとりに唯一人イめば  
 イめば其の蔭影の  
 硝子窓への接吻  
 私は酔つて居る。

狂人染みた家鴨の  
 濁つた鳴き聲を追つて行く  
 番太の子の薄笑ひ  
 むつしつては捨て捨て、はむしる  
 黄色い花の哀愁。

十月の歌

しばしの悲しみを  
 歌ふべき白銀の夜を  
 僧房の窓に手をのべ  
 うら若き尼は立つなり

立つ尼の手には燭もち  
怪しげにくちずさみつ、  
執着の黒き影追ふ  
十月の木の葉の搖ぎ。

窓あかり

夜更けの街のさびしさが  
追ふて行くよな下駄の音  
レストラントの窓あかり  
浸み込むやうな女聲。

△灯の行衛▽

おさが可愛や松原越しに  
主がともした灯が見ゆるぞへ  
戀の通ひ路とぼ／＼行けば  
涙をもたや露をもや

△奈良の秋▽

奈良は好い所秋の町  
鹿の聲さへしんめりと  
小雨に濡れる夕暮は  
假寝の宿の夢や何處

517  
502

量の慈養 2

△繪皿の灰▽

焼いてしまつた戀の文  
残つた灰は夢のあと  
繪皿にうけてそと窓へ、、、  
捨てどころなき此の思ひ

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 夢, 窓, and 思ひ）

大正七年五月廿六日印刷  
大正七年五月廿日發行  
三重縣飯南郡松江村大字四之庄  
二百三十四番地ノ二  
編輯兼發行者 森西庄五郎  
印刷者 三重縣飯南郡松阪町大字魚町三番屋敷  
山下雄次郎  
(非賣品)

終

